

セルマ・ラーゲルレーヴ『モールバック』および『エルサレム』における障碍と病

ラーゲルレーヴ国際会議

2015年11月20日(金) 於:城西国際大学

発表者:中丸禎子(東京理科大学専任講師)

I. 対象の説明と問題提起

1. 対象作品と作者(1) 基礎情報

- ※ セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』(Selma Lagerlöf, *Jerusalem*, 1901-02)
 - スウェーデン・ダーラナ地方の農民 37 人が、宗教上の理由からエルサレムに集団移住するという史実(1896年)に取材した長編小説
 - 作品の構成
 - ◇ 導入部(*Inledning*):主人公の父の結婚の顛末
 - ◇ 第一部『ダーラナで』(*I Dalarna*):主人公の父の死後、教区に新しい宗派が浸透し、農民たちがエルサレムへ旅立つまでを描く
 - ◇ 第二部『聖地にて』(*I det heliga landet*):農民たちのエルサレムでの生活とその間のダーラナを描く
 - 作品の特徴
 - ◇ 信仰のために故郷を捨てる農民たちと、屋敷と農地に執着してダーラナにとどまる富農イングマル・イングマルソンを対比
 - 作品の評価
 - ◇ 既刊作品によるラーゲルレーヴの国内外での高評価
 - * 『イェスタ・ベルリングのサガ』(*Gösta Berlings saga*, 1891)
 - * 『見えざる絆』(*Osynliga länker*, 1894)
 - * 『アンチ・キリストの奇跡』(*Antikrists mirakler*, 1897)
 - * 『クンガヘラの女王たち』(*Drottningar i Kungahälla*, 1899)
 - * 『地主屋敷の物語』(*En herrgårssägen*, 1899)
 - ◇ 『エルサレム』の特徴:リアリズムの要素が強い
 - * 「ファンタジーと現実が融合」
 - * 「スウェーデン文学の最高峰」
 - * イプセン、ビョルンソン、アイスランド・サガと並ぶ水準
 - * スウェーデン文学の世界的な名声
 - ◇ ノーベル文学賞
 - * 『エルサレム』第一部:出版した年に第一回ノーベル文学賞候補
 - * 1909年、『エルサレム』第一部・第二部により、女性初・スウェーデン人初のノーベル文学賞受賞

(2) 日本におけるラーゲルレーヴ受容

- ※ キリスト教文学
 - キリスト者による翻訳多数、キリスト教素材作品の翻訳多数
- ※ 児童文学
 - 『ニルス・ホルガションの不思議なスウェーデンの旅』(*Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*, 1906-07)の翻訳、アニメ化
 - 大人向け作品の児童文学としての翻訳 (例)野上弥生子『ゲスタ・ベルリング』
- ※ 反戦平和主義
 - 反戦平和主義者としてラーゲルレーヴを紹介した日本人
 - ◇ イシガオサム:キリスト者として兵役拒否・拘留の経験あり
 - ◇ 山室静:戦前にマルクス主義運動をし、拘留・転向。雑誌『近代文学』創刊同人。「平和はいつ来るのでしょうか」というラーゲルレーヴの「最期の言葉」(1940)を繰り返し紹介
 - 実際にラーゲルレーヴが行った反戦活動・ナチ批判

- ◇ 第一次世界大戦批判:『追放者』(*Bannlyst*, 1918)
- ◇ スペイン内戦(1937年~39年)批判:パブロ・ネルーダ(Pablo Neruda, 1904-1973)とルイ・アラゴン(Louis Aragon, 1897-1982)が主催した「反ファシスト作家の国際会議(An anti-Fascist congress of writers from all over the world)」に、ウィリアム・イエイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)と並び最初に賛同
- ◇ ナチの反ユダヤ主義批判:『土間で書いた話』(*Skriften på jordgolvet*, 1933)
 - ※収益をユダヤ人亡命のために寄付

(3)ドイツにおけるラーゲルレーヴ受容

- ※ ドイツにおける北欧受容
 - 19世紀半ば以降の民族主義高揚⇒「ゲルマン民族のルーツ」として理想化
- ※ ドイツにおけるラーゲルレーヴ受容
 - 郷土芸術運動(Heimatkunstbewegung)
 - ◇ 1890年ごろ~1918年ごろ:民族主義的・国家主義的な運動
 - ◇ フリードリヒ・リーンハルト(Friedrich Lienhard, 1865-1929)、アドルフ・バルテルス(Adolf Bartels, 1862-1945)らによる
 - ◇ 反自然主義・反近代。「大都市芸術」の対概念
 - * スローガンは「ベルリンから離脱せよ」
 - * 資本主義・工業化を「拝金主義」、社会主義を「賤民的懐古趣味」として批判
 - * 地域に根差した民族性・部族・風土の賞賛
 - ⇒「失われた根源的状态への、また異化されない存在への憧れ」としての郷土=排他的イデオロギー
 - 血と大地文学(Blut und Boden Literatur)
 - ◇ 第一次世界大戦後、郷土芸術運動が先鋭化したイデオロギー。ナチズムの思想的根拠
 - ◇ 農民の神話化。土との結びつき、郷土愛、家族(血統)を重視
 - ラーゲルレーヴ=「ユダヤ人と共産主義者に毒される前の根源的生」を描いた作家

(4)スウェーデンにおける『エルサレム』受容

- ※ スウェーデン文学史におけるラーゲルレーヴの位置づけ
 - 北欧九十年代文学(nittioalet)の代表的作家
 - ◇ ナショナリズムの高揚を特徴の一つとする
 - ◇ 農民=ナショナル・アイデンティティ
- ※ スウェーデン文学史における農民描写
 - 1880年代まで
 - ◇ 「こっけいな人物」もしくは「あわれみの対象」(社会問題を告発)
 - 世紀転換期
 - ◇ エレン・ケイ『表象』(Ellen Key: *Tankebilder*, 1898):ナショナル・アイデンティティとしての農民を提唱
 - ◇ 詩的な農民像
 - * エリク・アクセル・カールフェルド『父祖たち』(Erik Axel Karlfeldt: *Fäderna*, 1895)、『頑固なダークナ男の歌』(*En envis dalkarls visa*, 1898/スウェーデン)
 - * ペール・ハルストレーム『青い森の中で』(Per Hallström: *I blå skogen*, 1896/スウェーデン)
 - * アウグスト・ストリンドベリ『冠の花嫁』(August Strindberg: *Kronbruden*, 1901/スウェーデン)
 - ◇ 『エルサレム』の農民像
 - * 心理学的・存在論的観点
 - * 外国文学の影響
 - ◆ ヘンリック・ポントピダン『約束の地』(Henrik Pontoppidan: *Det forjættede Land*, 1891-95/デンマーク)

- ◆ ヨハネス・V・イェンセン『ヒンマーランドの人々』(Johannes Vilhelm Jensen: *Himmerlandsfolk*, 1898/デンマーク)、『王の没落』(*Kongens Fald*, 1900-01)
- ◆ オリーヴ・シュライナー『アフリカ農場の物語』(Olive Schreiner: *The Story of an African Farm*, 1883/南アフリカ)
- ◇ 『エルサレム』の評価
 - * 作者の不安:「醜く、堅苦しく、退屈な農民」は「教養ある読者」には受け入れられないのではないか
 - * 当時の意義:外面は醜いが内面は偉大な「倫理的英雄」という新しい農民像
 - * ヴィヴィ・エードストレーム(スウェーデン人研究者):「農場の大地を耕す農民像」は、ドイツの「血と大地神話」と「手を携える」

2. 問題提起

- ※ 『エルサレム』の農民像の「血と大地」との具体的な結びつき
 - 農民・農耕モチーフの暴力性＝大地の農地化
 - 「父の名の継承」の暴力性
 - ◇ 善意の発動とそれに伴う主人公の成長＝男性性による女性性の克服
 - * 女性をネガティブなものとして提示するラーゲルレーヴ⇨女性の社会進出の先駆者としてのラーゲルレーヴ
 - 「健康」言説の暴力性
 - ◇ 克服されるべき女性性を「障碍」「病」として表象
 - ◇ 比較:ナチの男性性・健康賛美と障碍者排除
- ※ 『エルサレム』論
 - ラーゲルレーヴの魅力の一つとされる善意は、どのように、「血と大地」言説と結びつくか/体現するか
 - ラーゲルレーヴに「血と大地」言説を超える可能性はあるか
 - ◇ 女性や障碍者:主人公の倫理や社会の論理から逸脱＋常識や人智を超えた存在
 - ◇ ラーゲルレーヴが描く女性や障碍者が、「ネガティブなもの」として書かれているがゆえに持ち得る、「血と大地」からの離脱可能性

II. 導入部の分析——農夫の大地母神殺し

- ※ 導入部「イングマルソンたち」:「父の名の継承」と「母殺し」
 - 導入部の主人公(本編の主人公の父)の名は、イングマル・イングマルソン。同名の父と区別するため、「草イングマル」と呼ばれる。「神の道を行く」生き方で教区の人々の尊敬を集めてきた富農の跡取り息子。
 - 代々の当主の名は「イングマル・イングマルソン」
 - ◇ イングマルの家の男性は「イングマルソン(イングマルの息子)」、女性は「イングマルドッテル(イングマルの娘)」
 - ※スウェーデンでは、1900年ごろまで、ファミリーネームが一般的でなく、父の名前に、男性は「息子(son)」、女性は「娘(dotter)」をつける「父称(fadersnamn, patronymikon)」が使用されていた。なお、『エルサレム』における主人公の家では、父と子が同じ名前だが、北欧では、子どもに、おじ・おばや祖父母など、近い親戚と同じ名前をつけることが一般的
 - 小イングマル:畑を耕しながら、天国の「イングマルソンたち」に悩み事を相談
 - ◇ 背景
 - * 同族の娘と結婚する因習を破り、新興一族の国会議員の娘ベルイスクールのブリッタと結婚
 - * ブリッタは、イングマル一族の古い習慣に馴染むことも、イングマルを愛することもなかった
 - * 結婚予告のあと、不作が続いて結婚式が遅れ、式の前に子どもが生まれる
 - * ブリッタは子どもを殺して3年間投獄された
 - * ブリッタの子殺しを隠さなかったことで、イングマルは教区民たちから疎まれるようになった
 - 相談内容と結果
 - ◇ 刑期を終えたブリッタをアメリカに送るべきか、再び妻として迎えるべきか、天国の父祖たちに相談
 - ◇ イングマルは、ブリッタを再び妻として迎え、教区民たちに見直される

⇒これ以降、「大イングマル」と呼ばれるようになる

※ 二つの不道徳

➤ 婚前交渉⇒古い習慣

◇ 「人間のやり方に従う」のではなく、「いつも神とともに立つことを選んできたイングマルソンたちにとっては不道徳ではない

◇ 新興一族の出身で「古い習慣を知らない」ブリッタは、結婚式の前に子どもを産むことを恥じ、イングマルに復讐するために嬰兒を殺す

➤ 子殺し⇒罰と赦しの対象

【引用】『エルサレム』「イングマルソンたち」

「きっとブリッタはまるっきり正気を失っていたんだな」「彼女は十分に正気でしたよ。(…)ただ僕に復讐するためだけにやったことです」

※ メデア・モチーフとしての子殺し

➤ 森の中で一人で産んだ子どもを殺すブリッタ＝ギリシア神話のメデア(エードストレーム)

◇ 賢さと復讐＝メデアの特性

メデア(Μήδεια, Mēdeia)

コルキスの王女。自国の所有する金羊毛を取りに来たテッサリアの王子イアソンと恋に落ちる。魔術を使ってイアソンが父から金羊毛を強奪するのを助け、弟を八つ裂きにしてイアソンと駆け落ちする。イアソンはメデアを恐れ、コリントス王クレオンの娘グラウケとの結婚を望んで、メデアを捨てる。メデアは、イアソンへの復讐のため、グラウケ、クレオン、イアソンとの間に生まれた二人の息子を殺す自身との間の二人の息子を殺す。

※ 魔女と大地母神

➤ 古代ギリシア以降の「魔女」の原型＝それ以前の母権制・大地母神信仰(西村)

➤ 大イングマルのブリッタへの赦しの二つの意味

◇ 新興一族の娘ブリッタが、近代的結婚観に基づいて犯した罪を、前近代的倫理によって赦し、和解

◇ 農耕による大地の馴化／男性性による女性性の接収＝文明の暴力

大地母神とメデア(西村賀子の説明)

※ 大地母神＝魔女の起源

➤ そもそもは生と死を司る女神。生命の授与と剥奪の二面をあわせもつ

➤ 旧石器時代から地中海世界に広範に大地母神崇拝が流布

◇ イナンナ(イシュメール)、イシュタル(バビロニア)、アシュタルテ(フェニキア)、キュベレ(プリュギア)

➤ 古拙期のギリシアにオリエントから流入

◇ 大地母神的要素はオリュンポスの複数の女神(デメテル、アプロディテ、アルテミス、ヘラ、アテナなど)に分散

※ ギリシア古典の女性像は、女神から魔女への移行期の姿

➤ 魔女の飛行の起源:ハルピュイア、セイレン(女性と鳥のハイブリッド。鳥は、太古には大地母神の顕現形であり、他界との媒介者として死者の魂を冥府に運ぶ存在)

➤ 魔女の小児殺害とカニバリズム:バッカイの「スパラグモス(獣の体を素手で引き裂くこと)」と「オモパギア(生肉を喰うこと)」。

◇ 幼児を生贄にささげる儀礼。中世の魔女・バッカイ双方で、人里はなれた山野で行われた。

➤ キルケ(メデアと並び、古代ギリシア文学で固有名を持つ数少ない魔女。『オデュッセイア』に登場)

◇ オデュッセウスを冥界に送り出し、再び地上に迎える＝生と死を往復(大地母神)

◇ 森は死の国への入り口(ウラジーミル・プロップ)⇒魔女と大地母神は森に住む

◇ オデュッセウスを誘惑＝男心を惑わす淫乱さ(魔女的要素)

◇ 肉体的・情緒的に親密な関係を結ぶことを契機に、敵対者から援助者へと変化

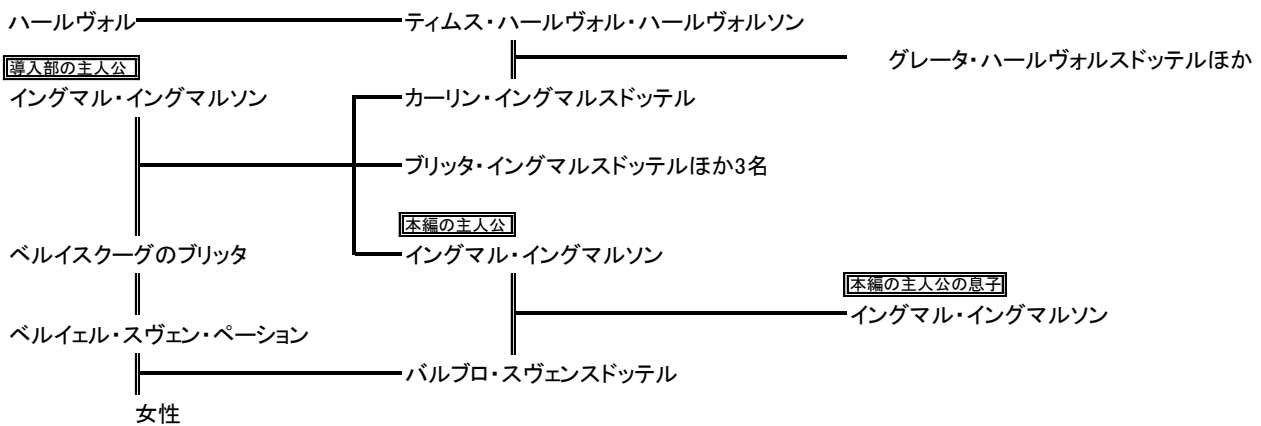
※ 大地母神としてのブリッタ

- 生命の授与と剥奪:自分で産んだ子どもを殺す
- 美人:濃い色の髪と輝く目、ばら色の頬。イングマルは、結婚の理由として、まずブリッタの美しさ、次いで有能さを挙げる
- 森との関わり
 - ✧ 森の中で子どもを産み、殺す
 - ✧ 出身地名から「ベルイスクークのブリッタ」と呼ばれる:ベルイ(berg) = は山、スクーク(skog) = 森
⇒人間によって耕され、支配される以前の太古の大地としての本性
 - ✧ ギリシア古典の女性とブリッタの違い:肉体的・情緒的に親密な関係を結んだ後の男性との力関係
 - * キルケ、メデア:オデュッセウスやイアソンと結ばれた後も、援助もしくは敵対が可能⇒男性と対等かそれ以上の力を持ち続け、最終的には決別
 - * ブリッタ:「悪い種類の女」としての性質を克服、イングマルの5人の娘と跡継ぎ息子の良き母親
⇒恵みと災いの双方をもたらす山・森のような性質を喪失
農地のように、人間に害をもたらさず恵みだけを与え、イングマルに支配される

※ イングマルの母殺し

- 大地母神ブリッタの馴化
- 実母の無力化:ブリッタを母の意にそむいて再び屋敷に迎える
⇒生前の父と同じ「大イングマル」という呼び名
- 父の名の継承と母殺しが平行
- 畑を耕しながら天国の父祖に相談⇒農夫イングマルが「母なる大地」を不毛な荒地から豊穡の農地へと変えることと、女性たちを克服・支配し、父の名を継承することが重なる

イングマル家系図



III. 本編の分析——健康な男性と病の女性

1. イングマル・イングマルソン 道徳的英雄としての農民

※ 作品の主人公イングマル・イングマルソンの道徳と「血と大地」の結びつき

- 主人公の成長 = 農民たちのエルサレム移民と並ぶ作品の柱
 - ✧ 12歳で父(大イングマル)を亡くし、年の離れた姉カーリン・イングマルズドッテルとその夫エリアスが屋敷の主となる
 - ✧ エリアスの酒乱から逃れるため、先生(地域の子どもたちに勉強を教えている人望ある農民)の家に預けられる
 - ✧ 17歳で先生の娘イェットルードへの愛を自覚、農夫としてイングマル屋敷に帰ることを決意
 - ✧ カーリンの二番目の夫ハールヴォルから屋敷を買い戻す資金を得るために、森で林業をしている間に、アメリカ人伝道師ヘルグムが教区にくる。
 - ✧ ヘルグムの教えは教区で勢力を伸ばし、カーリンやイェットルードも入信、ヘルグム派はイングマル屋

敷で集団生活を始める

- ◇ イングマルは、父から伝えられた信仰を捨てるか、「イエットルードも、製材所も、古い屋敷も失う」という二者択一を迫られる
- ◇ イングマルはヘルグムを憎むようになるが、ヘルグムが襲われている現場に居合わせて彼を救い、傷を負う
- ◇ カーリンに、手当てをさせる条件として、ヘルグムをアメリカに帰すことを約束させる
 - * アメリカに帰ったヘルグムは、アメリカ人の宗教指導者ミセス・ゴードンと出会ってエルサレムに移住
- ◇ イエットルードはヘルグム派から抜け、イングマルと婚約
- ◇ ダーラナのヘルグム派は、ヘルグムを追ってエルサレムに移住。カーリンは移住資金を得るため、屋敷を競売にかける
- ◇ イングマルは、イエットルードを捨て、屋敷を競り落とした富農の娘バルブロ・スヴェンスドットルと結婚
- ◇ 第二部では、イエットルードが発狂したとの知らせを受けてエルサレムへ
 - * エルサレムでは、暑さと不和のため農民たちが次々と死去していた
- ◇ イングマルは、アメリカ人コロニーに、それまで禁じられてきた農耕と経済活動を導入⇒スウェーデン人たちは働くことで活気を取り戻す
- ◇ イングマルは、街で見かけたイエスに似たムスリムの苦行僧を、本物の救世主だと思い込むイエットルードに、苦行僧が弟子たちと不気味な踊りを踊っている現場を見せる
 - * イエットルードは現実を認識し、エルサレムですっと彼女を見守っていたヘーク・ガブリエル・マツソンとの愛を確認
- ◇ イングマル、イエットルード、ガブリエルはダーラナに帰り、イエットルードはガブリエルと結婚、イングマルはバルブロと復縁

※ イングマルの道徳

➤ 責任感・勤勉実直

➤ 「イングマルソンたちは、決して他の人々のように振舞わない」：父祖の名を受け継ぐ者として、「血」の要求に応じて葛藤し、道徳的にふるまう⇒因習や常識に従うのではなく、自分の頭で考え、自分の良心に従う倫理的近代人のあるべき姿

- ◇ 憎んでいたヘルグムを暴漢から救うを見て見ぬふりをしようとするが、「誰もが必ず生涯に一度、恥ずべきことが不正を行う、という彼の一族に関する古い言葉」により考え直す
- ◇ イエットルードを裏切ってバルブロと結婚⇒生涯にわたってイングマル屋敷に仕えてきた老人たちが、主人の交代によって家を追われることを防ぐため、自分の感情を殺す
- ◇ エルサレムで、アメリカ領事とコロニーのロシア人信者がゴードン派の解散をたくらんでいることを知り、事態をミセス・ゴードンに知らせる⇒自身の願いである教団解散のチャンスを棒に振る
- ◇ ユダヤ人の老婆が、イギリス人の病院で死んだために、ユダヤ人墓地への埋葬を拒否され、遺体を掘り返される現場に居合わせ、墓を掘る男たちと争って片目を失う
- ◇ 妻バルブロは、自らが「盲で白痴」の息子しか産めない呪われた家系の出身だと信じており、イングマルの留守中に生まれた子どもの父親はイングマルではないと偽るが、自分と同じ名前を子どもに与える

※バルブロは、先祖の犯した罪によって、娘はみな賢く美しいが、息子は必ず「盲で白痴(blind och idiot)」であるという「呪い」をかけられた一族の出身であることが、イングマルとの結婚後に判明する。『エルサレム』では、視覚障害者・知的障害者が、はっきりと差別の対象として書かれているため、ここでは blind と idiot をあえて差別用語を用いて訳出した。

⇒自分が共感できない相手に対して正義を貫く

* 人格の成長+父祖から受け継いだ共同体を、近代的倫理にかなう新しい共同体へと発展

- ◇ 道徳的な決断の代償としての怪我⇒アイデンティティの完成

※主人公の成長を描く「教養小説」では、怪我や病気など身体的な危機からの回復が、疑似的な死と生まれ変わりを暗示し、主人公の成長(新しい人間への生まれ変わり)を示唆する。

- ◇ アイデンティティ=農夫であること

※ 農夫であることと道徳の結びつき:道徳を完遂して人徳を得れば得るほど、「領土」を拡大

- ヘルグムを助け、追い出す⇒反ヘルグム派の指導者となり、ヘルグム派はエルサレムに去る
- イェットルードへの思いを殺してバルプロと結婚⇒屋敷と農場を手に入れる
- アメリカ人コロニーを救う⇒ミセス・ゴードンの信任を得て、コロニーに農業と経済活動を導入
⇒ダーラナとエルサレムの二つの大地を耕す者／耕し手の指導者
- 老婆の墓を掘り返す男たちと戦う⇒大地のみならず、河も支配

【引用】『エルサレム』第二部「イングマルの戦い」

彼は足早に、静かに前に進んだ。今、心は一度に軽くなり、喜びに近い感情が湧いた。「これはまったく狂気の沙汰だ」と、彼は考えた。「だが、もしもお父さんの最期の日に、誰かがお父さんが子どもたちを追って水に入って行くのを見て、気をつける、岸に留まれ、と叫んだとして、お父さんは何と申すだろうか。今、このことについて、僕には自分の意志がある、お父さんと同じように、この僕にも。この僕の前には、黒く怒り狂う水をたたえた悪の河が流れていて、死者も生者もさらっていく。だが、僕はもう、岸にじっとしていることはできない。今こそ、この中に出て行って、流れと戦う。」

⇒比喩的な意味だが、父を殺した「河」と戦う決意をし、片目を失いながらもその戦いに勝利

(比較) 北欧神話の主神オーディン: 宇宙を救う智慧を求めて世界をめぐり、智慧の泉の水を飲む代償に自らの片目を差し出す

- ※ 片目と引き換えに智慧を得て帰郷⇒人徳と智慧を以って、良き伴侶と跡継ぎを得て、イングマル屋敷の正式な主／一人前の農夫になる

2. カーリン・イングマルズドッテル 麻痺の系譜

(1) カーリンの麻痺

- ※ 本編において、イングマルと対をなす人物

- 健康なイングマル⇔病のカーリン (比較: 導入部の主人公の道徳⇔ブリッタの不道徳)
- イングマルの年の離れた姉(イングマルとの間に4人の妹)
 - ✧ 大イングマルの風貌と威厳を受け継いだ古めかしい農婦
- ティムス・ハールヴォル・ハールヴォルションと婚約
 - ✧ 喜んだハールヴォルが酔いつぶれて醜態をさらしたため婚約を破棄
- エリアス・エーロフ・エーションと結婚
 - ✧ 大イングマルの死後、エリアスは酒びたりになり、ある日、事故で寝たきりになる
 - ✧ エリアスから弟妹を遠ざけるため、上の妹二人の結婚を段取り、下の妹二人をアメリカで成功した親類のところへ送り、イングマルを「先生」の家に預ける
 - ✧ エリアスは、言葉でカーリンを苦しめ、一年半が経ったころ、疲れきったカーリンは自身の死を予感
 - ✧ ハールヴォルがエリアスを引き取ることを申し出る。ハールヴォルは、屋敷と地位のためではなく、カーリンを愛して求婚したことが判明
- エリアスの死後、身分や地位のある3人の求婚者を退けてハールヴォルと再婚

- ※ 麻痺するカーリン

- ダーラナでの麻痺と回復
 - ✧ 死んだエリアスの夢を見、覚めた時には足が麻痺
 - ✧ 数ヵ月後、「健康で実用的」で「情緒的でなく、実践と活動」を重んじたヘルグムの教えを聞く
 - ✧ 数日後、歩き始めたばかりの娘が暖炉に近づいた時、カーリンは思わず娘に駆け寄る。

【引用】『エルサレム』第一部「ヘルグム」

カーリンは本当にまっすぐに椅子に座っていた。頬の赤い炎は長く燃え続けた。

“今では自分の家でさえ、平安のうちにすごすことは許されないとは！”彼女は考えた。“おかしい話だわ、こんなにたくさん、自分は神から遣わされたと信じる人がいるなんて。”

しかし、全く急にカーリンは見た、彼女の小さな娘がかまどの方へと急ぎ向かっていくのを。小さな子はちょうど、そこで燃えている火を見たのだ。彼女は喜びのあまり叫び、はいはいをしたり、跳ねたりしながら、できる限りの力を使ってそちらへ向かった。

カーリンは彼女に戻ってきなさいと叫んだが、子どもは聞かなかった。子どもはかまどによじ登ろうと一生懸命

命で、何度か転んで落ちたが、とうとうかまどの石板によじ登り、そこには火が燃えていた。
 ——神様、わたしをお助けください、神様、わたしをお助けください！カーリンは言った。
 彼女は大声で叫んだ、近くには誰もいないことはわかっていたというのに。
 少女は笑いながら火の方へ身をかがめた。そのとき、燃えさかるまきが一本、炎の中から転がり出て、彼女の黄色い上着へと落ちかかった。
 それと同時に、カーリンはまっすぐに床に立ち上がり、かまどへ駆けよって子どもを抱き上げた。
 火の粉や炭をすべて振り払い、娘を見て無傷であることを確かめるまで、彼女は、起こったことに気付かなかった。彼女が自分の足で立っているということ、彼女が歩いていたということ、彼女がずっと歩いていけるということに！
 カーリンは、彼女が生涯で感じたうちで、最も大きな魂の震えを体験し、同時に最も大きな幸せを感じた。彼女は知った、彼女が神の特別な庇護と支配のもとにあり、神の聖なる男を、彼女を助け、いやすために、神が彼女の扉のうちへと送ったということ。

⇒神の加護と力を知り、ヘルグムを神の使いと信じて、先祖から受け継いだ屋敷を競売にかけてエルサレムへ
 ▶ エルサレムでの「麻痺」
 ✧ 夫と一番下の娘を亡くし、自らも病に苦しむ。

【引用】『エルサレム』第二部「パラダイスの泉」
 カーリン・イングマルズツテルは今ではすっかり腰が曲がっていた。彼女はぞっとするほど年を取り、顔は小さくしわだらけになって、髪はすっかり灰色になっていた。
 ハールヴォル・ハールヴォルションが死んでから、カーリンはほとんど自室から出てこなくなった。彼女はそこで、ハールヴォルが彼女のために作った大きな椅子に一人で座っていた。時々、彼女のもとに生き残った二人の子どものために繕いものや食事の世話をするものの、ほとんどの時間を手を組んで座り、じっと前を見つめていた。

⇒椅子に座り続ける＝ヘルグムによって一度は癒されたはずの「麻痺」の再来
 (比較) イエスが起こした足の不自由な者を立てて歩かせる「奇跡」

- ※ カーリンの「奇跡」は、ダーラナでのみ起こる
- ▶ ミセス・ゴードンやヘルグムから帰国を勧められるが、拒否

【引用】『エルサレム』第二部「パラダイスの泉」
 カーリンは一瞬、本当に何かに打たれてもしたように、体を沈めた。輝きをなくした彼女の目に、何よりも深いあこがれが灯った。彼女は、目の前に古い屋敷を見、大部屋の暖炉の傍らにもう一度座り、門の前に立って、春の朝、牧草地に追われる家畜を見ることが自分の姿を、確かに思い描いていた。
 しかし、それは一瞬のことだった。カーリンはまっすぐに背を伸ばし、いつもと同じように強固な忍耐の色を顔に浮かべた。
 — 一つお聞きしたいのですが、カーリンは英語で言ったが、声ははっきりしていたので、皆も聞くことができた。神の声が、わたしたちをこのエルサレムへお召しになりました。どなたか、ここから去れと命じる神の声を聞かれたのですか？

- ※ カーリンの麻痺＝男性による女性支配
- ▶ カーリンが麻痺し続ける⇒イングマルの父の名の継承が可能
- ▶ イングマルの母のような人物(「母親以上に気を遣って、細々と世話を焼く」)⇒母殺しの対象
 (比較) イングマルの実母は第一部開始時にすでに故人。実母に変わり、カーリンが克服すべき「大地母神」の役割を果たす
- ▶ 信仰と屋敷をめぐるイングマルと対立、エルサレムに去る⇒イングマルは屋敷を手にする
 ⇒教区を導く「大イングマル」(唯一の「イングマル家の者」)になる
- ▶ 「ハールヴォルが彼女のために作った大きな椅子」でのみ生存
- ▶ 大イングマルの娘・イングマル屋敷の女家長としてのアイデンティティの喪失
- ▶ ハールヴォルの妻・ハールヴォルの子どもの母としてのアイデンティティのみ残る
 ⇒「母性」による麻痺の克服と麻痺による「母性」への限定

※ カーリンが麻痺しながらエルサレムに残る＝イングマルの母殺しの完遂

(2) 少女小説における麻痺

- ※ ロイス・キース、『起きて、床を担いで歩け』(Lois Keith: *Take Up Thy Bed and Walk*, 2001; 邦訳『クララは歩かなくては行けないの？少女小説に見る死と障害と治癒』、2003年)
- 19世紀・20世紀少女小説における少女の麻痺／病と治癒:歩けるようになるか、死ぬ
 - 歩けない女性や障害のある女性は、「女性が常に身につけなくてはならない、忍耐、明るさ、なにごとく精一杯やることなどの従順な行動と同じ性質のものを身につけなくてはならない」
(例)シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847英) ヘレン・バーンズ⇄ジェイン
ルイザ・メイ・オールコット『若草物語』(1868/69米) ベス・マーチ⇄ジョー
スーザン・クワールリッジ『すてきなケティ』(1872アメリカ) ケティ・カー⇄ヘレン
ヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』(1880/81スイス) クララ・ゼーゼマン⇄ハイジ
- ※ 椅子に座ることは、「麻痺」のヴァリエーション (例)ルイザ・メイ・オールコット『若草物語』ベス・マーチ
- 四人姉妹の三女。13歳。主人公のジョーと一番仲が良い。内気で学校に行かず、いつも家にいる。人形の世話や家事をするのが好き。猩紅熱から回復するが、以後、体調不良が続く。『続若草物語』で死去、19歳。
 - 姉妹が使わなくなった人形を保護、着せ替えなどをさせ、街に連れて出る
 - メグは金持ちとの結婚、ジョーは小説家として名を挙げること、エイミーは画家になるためローマに行くことを夢見るが、ベスには将来の夢はない
 - 戦地で病気になった父の看病のため、母が家を空けた際には、それまで母がしていた「仕事に行くメグとジョーの窓からの見送り」を代って行う
 - 『続若草物語』で、メグ、ジョー、エイミーは結婚するが、ベスは結婚しない。(その可能性も示唆されない)
※ジョーのモデルになった作者オールコットは生涯結婚しなかった
 - 「隅っこに座っている」性格設定

【引用】『若草物語』「巡礼ごっこ」

「両親そろって、姉妹そろっていればけっこうじゃないの。」いつもの席から、ベスのおちついた声でした。

【引用】『若草物語』「重荷」

世の中にはベスのようなひとがたくさんいるものです。はにかみやで、おとなしくて、用のあるときまでは隅っこにすわっていて、他人のためにつくすことが生きがいであり、ですからこの小さな炉端のこおろぎが鳴くのをやめて、やさしくほがらかなそのすがたが、静かな影のかなたに消え失せたあとになって、はじめて周囲はその献身のほどを思い知らされるのです。

※ 椅子は「保護」の象徴 (例)ヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』

- アルムに到着したハイジのために、おじいさんが椅子を作る

【引用】『ハイジ』「おじいさんの家で」

「よくできた。お手伝いがじょうずだね。だが、どこへすわるか？」

一脚しかないいすには、おじいさんが自分ですわります。ハイジは、かまどのところへとんで行って、あの小さな三脚をとってくると、その上に座りました。

「すわるとこだけはできたが、ちよいとひくすぎるようだね。」おじいさんはいいました。「かといって、わしのいすだって、テーブルには手がとどかんだろ。だが、とにかくまず食うことだ。よし、こうしろ！」

そういって、おじいさんは立ち上がり、おわんにやぎの乳をついで、それをいすの上ののせ、いすごと三脚のすぐそばによせてやりました。これで、ハイジのためのテーブルができたわけです。

(…)

おじいさんはすぐ、となりの小さな納屋へ行き、まずまるい棒を切りそろえました。それから一枚の板をけずり、あなをあげ、そのあなに棒をつきさして、全体を組み立てました。まあ、あつというまに、いすができてしまいました。おじいさんの使っているのにそっくりで、ただし、すわるところはずっと高くなっています。ハイジはびっくりして、声も立てずにながめていました。

「ハイジ、何だかわかるか？」

「あたしのいす。こんなに高いんだもの。もうできちゃったの！」ハイジはただもううっとりして、夢見ごこちのままこたえました。

(3) セルマの麻痺

- ※ ラーゲルレーヴ作品に登場する病気の女性
 - 『イェスタ・ベルリングのサガ』(1981):エバ・ドーナ(病弱)、マリアンネ・シンクレア(天然痘)
 - 『地主屋敷の物語』(1899):イングリッド・ベルイ(病弱)
 - 『御者』(1912、『幻の馬車』というタイトルで広く知られる):シスター・エディット(結核)
 - 『エルサレム』(1901・1902):カーリン・イングマルスドッテル(麻痺) 自伝『モールバック』(1922):セルマ(麻痺)
- ※ ラーゲルレーヴ:実際に足に障害。『モールバック』で、その顛末を明記(事実か否かは不明)
 - 3歳半のセルマ、突然足が麻痺して寝たきりになる。
 - 6歳のセルマと家族は、療養のために温泉地に行く
 - 旅行の船上で、幼い「セルマ」は、船長室に「樂園の鳥(paradisfågel)」がいるという話を聞き、船長室まで、「立って歩いて」行く
- ※ ラーゲルレーヴは、温泉旅行の後でストックホルムの医者にかかり、不自由はあるが歩行可能になる
 - その後も、自著の語り手を「病人」として表象



▲ラーゲルレーヴの靴。左右の高さ・大きさが違う



▲モールバックで飼われている「樂園の鳥」

【引用】「あるサガのサガ」

語り手になりたいと望んだのは、[...]男の子ではなく、女の子で、病気だったために、他の子どもたちのように遊んだり、跳びはねたりできない子でした(en av flickorna, en, som var sjuklig, så att hon inte kunde leka och springa så mycket som andra barn)。その代わり、彼女の一番の喜びは、本を読んだり、お話を聞いたりして、世の中で起こったあらゆる偉大なこと、珍しいことを知ることでした。

(比較) イングマルとバルプロの息子:「他の子と同じように」「遊び、跳ね回る」

【引用】『エルサレム』「巡礼からの帰還」

彼女は手を組み、神に感謝し始めた、彼女は低く、ふるえる声で語ったが、イングマルにはきっと彼女の言うことが聞こえたことだろう。呪われた子どものことでわずらっていたあらゆる憂いを、彼女は今、神に告白し、そして感謝した。なぜなら、彼女の子どもはほかの皆と同じようになり、彼女は彼が遊び、跳ね回るのを見ることができ(därför att hon skulle få se honom leka och springa)、彼が学校に行き、読み書きを習うのを見ることができ、彼は斧を操り鋤の後ろを行く強い若者になり、妻を得て家長として古い屋敷に住むことができるだろうからだ。

- ※ ラーゲルレーヴによる二重の女性排除
 - 罪・呪い・病・不道徳・麻痺などのネガティブなものを、自分自身を含む「女性」の特性として表象
 - 麻痺する女性と健康な男性を対置
 - ※ 女性解放運動の旗手としてのラーゲルレーヴ
 - 『エルサレム』により、スウェーデンの「国民作家」として国際的に認められる
 - 1907年:女性初のウップサラ大学の名誉博士号
 - 1909年:女性初のノーベル文学賞受賞
 - 1914年:女性初のスウェーデン・アカデミー会員選出
 - 1915年:国会演説「家庭と国家」 女性参政権運動
- ⇒女性初＝「男性と同じように」

IV. 「麻痺した少女」が超えていくもの

※ 『エルサレム』に対する批判と別の可能性

- 可能な批判: 男性が女性を駆逐する男尊女卑的な作品であり、ものごとを二項対立的に分け、ネガティブなものを排除する志向は、人類をアーリア人種と非アーリア人種に、優生と不適に分け、後者を排除したナチズムに通じる
- 上記の批判は可能だが、『エルサレム』では、それがすべてではない
 - ◇ ロイス・キースの批判: 19世紀・20世紀文学では、障害が一樣に「悪いこと」として書かれ、障害者が、「聖人」のように描かれて死ぬか、「奇跡」が起こって癒されるかのどちらかに二分され、障害を持つまま生き延びる例がない
 - ◇ どういった表象であれ、障害者を障害者であるがゆえに特別な存在と見なし、ステレオタイプ化することには懐疑的であるべき
- 日常的な倫理から一旦離れて、作品の表現に目を向ける: 障害者が特別視される≠特別な存在がネガティブに描かれている
⇒ ラーゲルレーヴ作品におけるネガティブなものは、ネガティブであるがゆえに、ポジティブなものは持ち得ない可能性を秘めたものとして表象

※ ラーゲルレーヴの自己表象＝病気の女性

- 本名で活動、「女性作家」としての自己を提示
(比較) 男性名で活動した同時代の女性作家
ヴィクトリア・ヴェネディクトソン (Viktorina Venediktson, 1850-88 / スウェーデン) = 「エルンスト・アールグレン (Ernst Ahlgren)」
カーレン・ブリクセン (Karen Blixen, 1885-1962 / デンマーク) = 「イサク・ディーネセン (Isak Dinesen)」
- 『モールバック』の「セルマ」＝麻痺した少女 / 奇跡に与る存在

【引用】『モールバック』「楽園の鳥」

彼女は椅子によじ登り、そこから机に登りました。そして、楽園の鳥の傍らに座って美しさに見とれました。キャビンボーイは傍らに立ち、光り輝く、大きく広げられた羽を彼女に見せました。そして言いました。「見なよ、楽園から来たみたいだろ。足がないんだ。」

楽園では歩く必要はなく、ただ二枚の翼があれば良いのだ、という彼女の想像に、これはぴったりでした。彼女は大きな信心を持ってこの鳥を眺めました。彼女は夕暮れのお祈りを読み上げる時とちょうど同じように、手を組みました。彼女はキャビンボーイが、この鳥がストレームベルイ船長を守っていることを知っているのか、とても気になりましたが、聞いてみようとはしませんでした。

※ 足がない＝楽園を飛べる翼を持つ

- キャビンボーイには分からない鳥の聖性
- 歩けないセルマだけが、足のない鳥と楽園を共有

※ 『あるサガの物語』の「病気の少女」

- 「本を読んだり、お話を聞いたりして、世の中で起こったあらゆる偉大なこと、珍しいこと」に目を向ける

※ カーリン・イングマルスドッテルが座り続ける椅子

- 家庭ではなく、神の都エルサレムにある
(比較) ロイス・キース: 麻痺＝女性を家庭に縛り付ける比喻
- 「イングマルの生」と「カーリンの死」は対立するものではなく、「イングマル一族」の両面⇒ 現世を担うイングマルと楽園を担うカーリンがそろって初めて、『エルサレム』の世界が完結
- カーリンの担う死: 生から解放されて天国・楽園に至る道であり、イングマルとは別の形で一族の誇りを全うする方法
(比較) 歩けないセルマがこの世の重力から解放されて楽園を垣間見る

※ ラーゲルレーヴ文学における麻痺した女性

- この世の価値から解放され、別の世界に旅する可能性
- ラーゲルレーヴ文学の、民族叙事詩、国民文学という、近代国家的な枠組みを離脱する可能性

<参考文献>

- * Selma Lagerlöf: *Jerusalem I. I Dalarna*. Stockholm (Albert Bonniers Förlag AB) 1981
 - * 石賀修訳『エルサレム 第一部』岩波文庫、1942
- * Selma Lagerlöf: *Jerusalem II. I det heliga landet*. Stockholm (Albert Bonniers Förlag AB) 1981
 - * イシガオサム訳『エルサレム 第二部』岩波文庫、1952
- * Selma Lagerlöf: *Mårbacka*. AIT Trondheim (Albert Bonniers Förlag) 2001
 - * はまゆりあやめ訳『モールバック』(Kindle版) Amazon Services International, Inc ※電子書籍のみ
- * Selma Lagerlöf: *En saga om en saga. I: En saga om en saga och andra sagor*. Stockholm (Bonniers Grafiska Industrier AB) 1984
- * Selma Lagerlöf: *Hem och stad. I: Troll och människor*. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1915

- * Alcott, Louisa May: *Little Women* (Penguin Classics) 1989
 - * ルイザ・メイ・オールcott『若草物語』、矢川澄子訳、岩波書店、1985
- * Vivi Edström: *Selma Lagerlöf. Livets vågspel*. Uddevalla (Natur och Kultur) 2002
- * Jürg Glauser (Hg.): *Skandinavische Literaturgeschichte*. Stuttgart; Weimar (J. B. Metzler) 2006, S. 215.
- * Uwe-K. Ketelsen.: *Völkisch-nationale und nationalsozialistische Literatur in Deutschland 1890-1945*. Sammlung Metzler Band 142. Stuttgart (J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung) 1976
- * Lois Keith: *Take Up Thy Bed and Walk*, Routledge, 2001
 - * ロイス・キース『クララは歩かなくてははいけないの？少女小説に見る死と障害と治癒』、(藤田真利子訳、明石書店、2003年)
- * Anna Nordlund: *Selma Lagerlöfs underbara resa genom den svenska litteraturhistorien 1891-1996*. Stockholm/Stehag(Brutus Östlings Bokförlag Symposion) 2005
- * Pablo Neruda: *Memoirs*. Translated by Hardie St Martin. London (Souvenir Press) 1977
- * Jennifer Watson: *Swedish Novelist Selma Lagerlöf, 1858-1940, and Germany at the turn of the century. O du Stern ob meinem Garten*. Scandinavian Studies Vol.12. Lewiston/ Queenston/ Lampeter (The Edwin Mellen Press) 2004
- * Henrik Wivel: *Snedronningen*. København(G.E.C. Gads Forlag)1988. (Henrik Wivel: *Snödrotningen. En bok om Selma Lagerlöf och kärleken*.Översättning av Birgit Edlund. Uddevalla (Bonniers) 1990
- * 石原俊時『市民社会と労働者文化』木鐸社、1996
- * ヨハンナ・シユペーリ『ハイジ』、矢川澄子訳、福音館書店、1974
- * 中丸禎子「男性・農地・健康／女性・森・病—セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』における「血と大地」」、『詩・言語』70号(東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会)、pp.27-46、2009年3月刊行(東京大学学術機関リポジトリ)で閲覧可。<http://hdl.handle.net/2261/24316>
- * 中丸禎子「ドイツ民族主義と北欧—「郷土芸術運動」および「血と大地文学」における北欧文学の受容」、『詩・言語』74号(東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会)、pp.1-16、2011年3月刊行(明治大学学術成果リポジトリ)で閲覧可。<http://hdl.handle.net/10291/12317>
- * 西村賀子「魔法のルーツを西洋古典文学にさぐる」、安田喜憲編『魔法の文明史』、八坂書房、2004年
- * ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』、斎藤君子訳、せりか書房、1983

<発表者紹介>

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学。博士(文学)。専門はスウェーデン文学、北欧文学、ドイツ文学。東京理科大学専任講師。明治大学非常勤講師、京都大学非常勤講師、早稲田大学非常勤講師。

近年の主な業績

- ◆ (近刊)小澤実・高橋美野梨・中丸禎子編『アイスランド、グリーンランド、北極を知るための65章』、明石書店、2016年3月刊行予定
- ◆ 主催「シンポジウム 高畑勲の<世界>と<日本>」於:東京理科大学、2015年9月1日
※高畑勲監督を招いて開催した一般公開シンポジウム。プロジェクト人魚・日本ハイジ児童文学研究会主催
- ◆ 論考「北の孤島の家族の形 海、自分だけの部屋、モラン」(pp.128-141)、インタビュー(聞き手):リーッカ・タンネル「最後に始めた新しいこと トーベとトゥーリッキの共同作業」(pp.122-127)、「トーベ・ヤンソン年表」「トーベ・ヤンソン著作リスト」(pp.226-240)、『コリイカ 特集=ムーミンとトーベ・ヤンソン』8月号、青土社、2014年7月
- ◆ (分担執筆)「人魚姫のメタモルフォーゼ」、石井正己編『子守唄と民話』所収、三弥井書店、pp.149-164、2013年3月
- ◆ 「太陽の国、エデンの東—セルマ・ラーゲルレーヴ『ポルトガリエンの皇帝』における三つの層」、『文学』第12巻・第1号(1・2月号)、岩波書店、pp.215-231、2011年1月

メールアドレス:nakamart@rs.tus.ac.jp

ホームページ:「北欧文学・ドイツ文学 中丸禎子のページ」(個人)http://www.7b.biglobe.ne.jp/nakamaru_teiko/
「プロジェクト人魚」(研究代表者)<http://www.rs.tus.ac.jp/nakamart/>